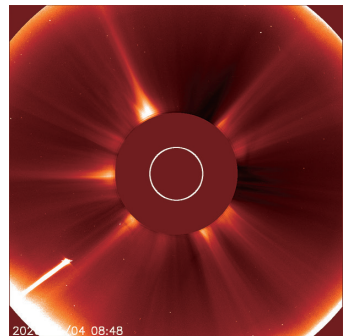


MAPS彗星崩壊

クロイツ群の彗星、MAPS彗星(C/2026A1)

2026年の1月に発見されたMAPS彗星(C/2026A1)は、非常に太陽に接近する珍しい軌道を持った彗星でした。似たような軌道を持つ彗星には、1843年の大彗星や、1882年の大彗星、1965年に観測されたイケヤ・セキ彗星、2011年に観測されて「クリスマスの大彗星」とも呼ばれたラブジョイ彗星などがあり、「クロイツ群」と呼ばれる彗星のグループとして認識されていました。クロイツ群に属する彗星は、太陽に非常に近づく軌道を持つほか、過去に長大な尾を見せたものも多く、MAPS彗星も、2026年4月中旬頃に長い尾を見せる可能性があると考えられていました。

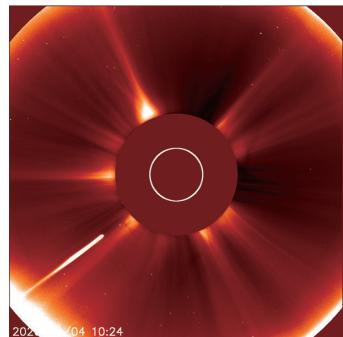
発見されてから3月下旬までの観測では、MAPS彗星はそれほど大きくないだろうから太陽に近づいた際に崩壊消滅するのではないか、という意見と、太陽に接近しても太陽の熱に耐えて、4月中旬に大彗星になるのではないかという意見があり、4月4日の太陽への最接近前後の様子が注目されていました。



運命の4月4日

3月末から4月に入ると、MAPS彗星は太陽に近すぎて、地上からの観測が困難になりました。一方で、太陽観測衛星SOHOのカメラの視野に入ってくるようになり、世界中の彗星ファンが、SOHOのカメラ画像に注目していました。

運命の4月4日のSOHOの画像ですが、まだ太陽最接近手前の10:24(UT)の画像(写真下)で、すでに彗星頭部の明るさが8:48分の画像(写真上)の時の彗星頭部の明るさより減少しており、彗星の崩壊を予感させる状況のまま、彗星はSOHOのカメラ中心部のマスク(太陽の明るすぎる光を隠す部分)の向こう側へと消えていきました。そして、二度とその姿を見せることはなかったのです。残念ながら、MAPS彗星は太陽最接近時に完全に崩壊・消滅したと考えられます。



©ESA/NASA

飯山 青海 (科学館学芸員)